

◆ 「タフ」になるということ ◆

あれは確か大学2年の頃。OR（Operations Research）関係の授業で、S先生がこんな話をされたことを覚えている。

「正月、元旦の新聞をよく読みなさい。特に1面。ここは、各新聞社が一番気合いを入れて作るんだ。」

というわけで、毎年、元旦のいくつかの新聞の1面が気になっている。

原発エネルギーの最新動向に触れている記事がある一方で、「成長の未来図」とのタイトルを掲げ、資本主義の来し方行き末について論評しているものもある。

そんななか、ある新聞の1面を飾るのは、“ドリカム”だった。同じ未来でも、こちらは「未来予想図 ともに歩もう」というタイトル。文化芸術の話題が1面で取り扱われていることに、そういった活動に携わっている身としてとてもうれしく思った。

一昨年はツアー18公演が全て中止となったそうだ。「ずっと暗闇の中、何もする気にならなくなった」と綴られている。ボーカルの吉田美和さんと、一緒に活動してきた中村正人さんは、9ヶ月会えなかったそうで、ようやく対面ライブが再開できたのが昨年10月。『未来予想図Ⅱ』には、「いつも以上に響いた」という声が届くようになったとのこと。

吉田さんはこう語る。

「サバイブ（生き残る）するには強い心で進まなきゃ、タフにならなきゃ、って」

物理的な「タフ（tough）」、強靱さのようなものももちろんだけれど、前にもこの「メッセージ」で触れたことがある「レジリエンス」に近い考え方の「タフ」もあるように思う。物事をしなやかに受け流す力。

村上春樹さんの小説『海辺のカフカ』の中で、「カラスと呼ばれる少年」は主人公「田村カフカ」くんにこう言う。

「そこに明るい光を入れ、君の心の冷えた部分を溶かしていくことだ。それがほんとうにタフになるということなんだ。そうすることによってはじめて君は世界でいちばんタフな15歳の少年になれるんだ。（後略）」

「心の冷えた部分」をゆっくりゆっくりと溶かし、物事をしなやかに受け流す「タフ」さ。そんな生き方があってもいい。

今週末から大学入学共通テストが始まる。焦らず、自分自身をしっかりと見つめ、「タフ」さをもって乗り越えて欲しい。



（参考、引用：令和4年1月1日付 読売新聞・日本経済新聞・朝日新聞 1面）